

認知症災害時支援モデル事業実践成果報告【弥富市】

【モデル事業名】（認知症共同生活介護施設内での垂直避難方法の確立）

1. 自治体情報（2023年1月31日現在）

(1) 人口	43,831人
(2) 高齢者人口	11,458人
(3) 高齢化率	26.1%
(4) 面積	48.28km ²
(5) 日常生活圏域	3圏域
(6) 地域包括支援センター数	1か所

2. 事業の背景・目的

<背景>

○弥富市の特徴として、東西が約9km、南北が約15kmと南北に長い地域で、海拔0m地帯が広がっている極めて平坦な地形である。

また、県の「津波災害警戒区域」の指定を受けており、津波による浸水などの水害とは密接な関係にあり、地形的に一旦浸水すると水が抜けにくい特徴がある。

○モデル事業を実施する施設（以下、「施設」という。）がある地域は、近くに木曽川が流れる住宅地の中にあり、市の浸水津波ハザードマップでは地震発生1時間後に浸水が想定される地域に該当している。

○施設は2階建てで、入居者数は定員計18名で1階、2階の各フロアに9名の方が入居され、生活を送っている。



▲弥富市における時間ごとの浸水エリア



◀施設周辺の様子

▶施設所在地



○市の指定避難所になっている弥富市総合福祉センターと施設までは約 700m 離れており、職員体制として日中は6名程、夜間は2名で対応しており、発災時の時間帯によっては入居者を避難所まで誘導することは難しい。

<目的>

○建物の特徴を活かして、施設2階への垂直避難の方法を確立していく。

- ・1年目：防災講師による防災研修、施設内で起こりうる課題の洗い出し
- ・2年目：施設の防災マニュアルの作成、防災訓練の実施、防災マニュアルの完成

3. 事業内容

<2021 年度>

○4月

- ・防災講師による施設周辺の状況確認

○5月

- ・「認知症高齢者の災害支援に関する講演会」（講師：愛知県立大学 清水宣明教授）を施設及び市防災課、市内にある他の施設も対象に開催。当初は集合型での研修開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、オンラインで開催した。（市内社会福祉施設に向けて配布したチラシは別添「参考資料1」参照）
- ・参加者：市役所からは防災課長始め5名、地域包括支援センター始め10施設

○8月

- ・地震によって施設が倒壊する可能性は低いという防災研修講師からの意見を踏まえ、当初計画していた垂直避難の避難行動計画の作成を進めていった。
- ・施設職員（以下「職員」という。）及び入居者を対象に防災研修講師による「災害弱者の命を守る対策の考え方」の講義を2回実施した。
- ・施設の特徴として、運営法人が全国でグループホームを運営しているため、本部の職員にも、オンラインで講義を聴講してもらった。
- ・災害時では、避難生活を施設で送ることになるため、断水や停電に備えた対策についても検討していった。
- ・ドタバタストーリー^{*}について、通常業務の合間を利用しながら、説明と作成を行った。

※ドタバタストーリーとは、災害時に起こりうる小さな出来事の集まりのこと。

<2022 年度>

○4月

- ・2021年度から取り組んでいたドタバタストーリーについて、施設職員同士や管理者との話し合いにより、計56個挙がり、そのうち、新型コロナウイルス感染症対策についての対応も14個挙がった。

- これらをもとにドタバタまとりっくす*を作成する。
- ※ドタバタまとりっくすとは、ドタバタストーリーを対象（入居者、職員、もの）や時系列（発災時、避難移動、落ち着き）ごとに整理した表のこと。
- ドタバタストーリーの一部抜粋（新型コロナウイルス関係のみ）
 - * 感染ゴミの処理の仕方に困る。 * 防護服、KN95 マスク等が足りなくなる。
 - * 認知症状により感染者が歩き回る。 * 保健所と連絡が取れない。
 - * 急変した際の搬送ができるのか、施設に医師がきてくれるか。
 - * PCR 検査や抗原検査ができない場合、誰が感染者か把握できない。
 - * 人が密集しており、ゾーン分けができない。 等
 - 断水した際の入居者や職員のトイレについての課題があり、市防災課に相談し、何度も洗って使える組み立て式の簡易トイレを購入。購入した簡易トイレなどの防災グッズを取り扱う地元の企業（以下、「協力企業」という。）の希望により本事業へ参画することとなった。
 - 以降、簡易トイレの組立講習や、ドタバタまとりっくすにある「もの」の部分について協力企業側から助言や提案を受けながら、事業を進めることができた。



◀ドタバタまとりっくす作成の様子

協力業者による簡易トイレの
説明・組み立て講習の様子▶



〇5月

- ドタバタストーリーに「2階に誘導している最中に1階にいる入居者が建物の外へエスケープしてしまったら」という課題があったため、「どこシル伝言板*」の導入を検討。初期導入説明会を開催した。
- ※「どこシル伝言板」とは、QRコードを活用した情報共有サービスのことで、クラウド上にあらかじめ情報を登録しておき、その情報が入ったQRコードを衣類等に貼り付けておく。行方不明になった場合に、発見者が衣類等に貼ってあるQRコードを読み取ることで、あらかじめ登録されている連絡先等へ瞬時に発見通知メールが届く仕組みになっており、位置情報も共有できる。
- また、事前に登録できる内容として、既往歴や身体的特徴、注意すべきことなどがあり、高齢者が入所施設で支援が難しい場合に、一時避難した際のカルテ等を持参することなく入居者の情報共有ツールとして活用することができる。



▲「どこシル伝言板」について

〇6月

- アクションカード※の作成にあたり、「垂直避難」においては、施設2階へ入居者を安全に移動するための道具について検討した。
- ※アクションカードとは、ドタバタまとりっくすで整理したイベントごとへの具体的な対応を記したものの。

アクションカードの作成の様子▶



- 2階への移動についての課題
 - * 階段の幅が狭く、入居者を寝かせて移動するほどのスペースが確保できない。
 - * 女性従事者のみで体格の良い入居者を移動させることはできない。
 - * 移動するための道具がない。何を使い移動させるか。
 - * 施設の階段は「コの字」型になっており、1階から2階までの間にはスペース（踊り場）はあるが、広くはない。



◀施設の階段の様子▶



〇9月

- アクションカードをもとに事前準備シート※の作成を行った。防災マニュアルや施設にある防災グッズの場所の確認と合わせて、防災講師による防災グッズの説明を受けた。
- また、協力企業からは、施設で使える防災グッズの提案や停電時にランタンをどこに

置いたら効率よく明るくできるかなどについて提案を受けた。
※事前準備シートとは、ドタバタストーリーの内容を解決するために事前に準備しておくべき内容やものなどを記入したもの。



▲防災グッズについての説明の様子

○11月

- 地域で開催した「防災ワークショップ」に参加し、各地区防災会の方と顔合わせをするとともに、地域の避難所（一般市民が利用する）で避難所設営についての研修と一緒に参加した。



避難所設営訓練の様子▶

○12月

- 施設内での防災訓練において、職員による2階への移動訓練を実施した。
 - 2階への移動訓練を実際に行い、どの方法が適しているか試した。
- *実際に試した方法
- ①施設にあるシート
 - ②椅子
 - ③協力企業が提案した移動用道具

▼③の道具を使用して訓練を行う様子▶



○2月

- ・防災訓練を実施し、1階の入居者を2階に移動する想定で訓練を行った。
(避難訓練の想定については、別添「参考資料2」参照)



◀入居者に声かけしながら移動する様子



布製の担架を使った移動支援の様子▶

- ・「どこシル伝言板」QRコード模擬訓練
 - *実際にエスケープした入居者がいた場合を想定して、職員自身のスマートフォンでQRコードを実際に読み込んでもらい、どのようにメールが届くかなどを体験してもらった。
 - *また、以下のような内容について、事前に登録する情報を職員で決めておく。
 - ◎内服薬
 - ◎既往歴
 - ◎注意すべき内容についてどこまで詳細に記入するか



模擬訓練の様子▶

4. 事業を進めていく上での工夫・配慮

- 事業1年目は、施設での新型コロナウイルス感染拡大防止対策により、入居者の家族についても面会を規制していたため、外部機関が施設に入ることが難しかった。
- 職員には、本事業の実施にあたって、たくさん協力をしていただいたが、日々の通常業務に加え、感染予防対策や職員の人員不足などでドタバタストーリーの作成が思うように進まなかった。このような中、施設でノート等を準備してもらい、いつでも記載できる環境を整備した。
- 浸水状況や支援物資の受取方法など施設側から市への質問に対して、担当課では回答できない内容が多くあったため、市防災担当者と連携して事業を行った。
- 2年間を通して研修の日程調整、アクションカードや事前確認シートの作成について、管理者に負荷が多くかかったため、声掛けを忘れないようにした。

- 地元企業の協力を得られたため、施設側では解決できない「もの」についての課題などは協力企業側からのアドバイスを取り入れるように事業を進めた。
- 防災講師から直接のアドバイスを聞く機会ができ、「避難しない選択」があることがわかり、職員の不安の解消になった。
- 避難生活を想定する中で、入居者の死亡時の対応について考える機会になった。
- 施設の運営法人は全国的な規模でグループホームを運営しているため、研修や避難訓練に本部の職員と一緒に参加してもらうことで、備品の購入や災害時の対応について、本部の職員にも理解してもらえるようにした。

5. 事業を通して見えてきた効果・課題

<効果>

- 職員が災害時について考えるきっかけになった。
- 防災マニュアルや備蓄品等を施設において準備していたが、職員が全く把握していない事を管理者が認識する機会になった。
- 近隣施設や地区防災会の方、地元企業と施設がつながるきっかけになった。
- 2階への避難方法について防災講師や市防災課、協力企業など多方面からアドバイスを受けることで移動方法を確立することができた。
- 避難生活を想定する中で、入居者の死亡時の対応をイメージし、マニュアルにすることができた。

<課題>

- 施設の通常業務がある中、すべての職員が事業に参加することが難しく、施設内での情報共有ができていないのか把握しにくい。
- 施設の床面積が限られており、避難生活が長くなることを想定すると、汚物の処理などに限界がくる可能性がある。
- 2階への避難誘導について、日中の人員基準を満たした状態で訓練を行ったが、夜間の2名体制での対応については今後検討していく必要がある。

6. 今後の展望

- 今回検討したドタバタストーリーのみではなく、通常業務の中で新たに起こるドタバタストーリーをアクションカードに落とし込み、防災マニュアルを更新していく。
- 管理者や職員の協力を得ながら、市内の他の施設に向けたアドバイザーとして活動してもらえるような体制づくりを構築していく。
- 施設を運営する法人において、今回の事業経験を基に全国にある他の施設でも防災マニュアルの作成を行っていく。

認知症高齢者の災害時支援に関する講演会

愛知県では、「あいちオレンジタウン構想第2期アクションプラン」に基づき、認知症高齢者の災害時支援体制の構築を進めるため、愛知県立大学と協定を締結しました。

これにより、令和3年度より『認知症高齢者の災害時支援モデル事業』として弥富市で2施設を対象に実施していきます。

各施設で防災計画の作成が義務づけられている中、今の防災計画を見直す機会とし、ぜひともご参加ください。

内 容 ～「災害弱者の避難の考え方」～

日 時 5月7日（金） 午前10時から

会 場 市役所 3階 大会議室C・D

講 師 清水 亘明 教授（看護学部）

感染症や防災に関して研究されており、保育園での災害モデル事業などに協力されています。



※同日・同時間帯にWEB（ZOOM）での聴講も可能です。
下記のIPアドレスよりご参加ください。

・ミーティング：922 9408 4893 ・パスコード478241

問い合わせ先：弥富市役所 介護高齢課 0567-65-1111
(内線 175)

【垂直避難】

○ 共通

令和 5 年 2 月 21 日（火）14 時 30 分に、渥美半島沖約 150 km を震源とする南海トラフに絡む東南海地震が突発的に発生、地震の規模はマグニチュード 9.0 で、震源深は約 30 km、各地の震度は弥富市震度 7 と観測、また、大きな海底の地殻変動で津波が発生、伊勢湾・三河湾に大津波警報が発令

○愛の家グループホーム弥富【五明地区】

突発的地震発生、地震の規模がマグニチュード 9.0 と大きく、揺れの時間が長く、国道 1 号線北側の堤防が 75% 崩落し、逐次、木曾川の流水が五明地区に流入、併せて地震発生に伴う津波の木曾川遡上で、浸水の深さ 50 cm である。

○避難想定

浸水の深さが増していく可能性があり、1 階入居者 9 名を 2 階フロアに移動させる。

まずは歩行可能な入居者より、スタッフ各 1 名が付き添い 2 階フロアに誘導。歩行困難な入居者については、補助具を活用しスタッフにて 2 階へ移乗介助を開始する

○当日の進行表

・ 15 時

施設従事者に向けて本日の訓練の説明

・ 15 時 15 分

2 階への移動手段の方法を検討する

（例：段ボール担架、施設にあるイス等、シーツ等）

・ 15 時 30 分

【A~D】スタッフ役（施設従事者）4 名 ※青色ビブス着用

【O】入居者役（市職員 1 名、スタッフ 2 名、入居者 6 名）※不織布ビブス着用

・ 15 時 45 分

避難行動についての振り返り

・ 16 時

終了

☆訓練開始

管理者：「本日の地震の影響により大津波警報が発令されました、2階スタッフ1名に協力してもらい、1階入居者さんを2階へ移動させます」

「スタッフの皆さん、1階の入居者さんが不安にならないように笑顔で対応しましょう」

「Aさん、本日の2階スタッフのBさんに声をかけてきてください。合わせて2階までの移動環境に危険がないか確認してください」

スタッフA：「2階までの移動箇所について危険箇所ありません」

管理者：「移動開始します」

「まずAさんは、〇〇さんと〇〇さんを2階へ誘導」

管理者：「Bさんと、Dさんで〇〇さんを移動用担架へ移乗し2階に誘導」

管理者：「次にAさん〇〇さんと〇〇さんを2階へ誘導」

管理者：「Aさんと、Bさんで〇〇さんを移動用担架へ移乗し2階に誘導」

管理者：「Bさんは2階フロアに戻り、入居者さんの状態観察を始めてください」

管理者：「Aさん、Dさん残り3名の方を2階へ誘導」

管理者により、1階に残っている方がいないか確認し、2階へ避難する。